

# 保育の現在的性格

津 守 真

ある朝、Tは登園するとすぐに私の手をひいた。玩具棚の前に座り、つみきの籠をおわそうとするので、私は手をかしておらした。Tは籠の中から木製の自動車をとって、床の上で動かす。

この段階では、私はTが何を考えているのかわからない。Tとはすでに三年以上のつきあいがあるけれども、きょうTが何を思つて私の手をひいたのか、それはきょうの新たなことである。Tの世界は、私の理解を越えた未知なものとして、私の世界に向きあう。一瞬の沈黙がある。この現在の瞬間は、それぞれの過去、現在、未来を含んだ世界の一部分である。私がこの時にTと向い合つてるのは、私がこの子たちを保育する仕事を選んだ

からであり、そして T がきょうの一 日を充実して生きてもらいたいと願うからである。T もまた、この日を生き甲斐のある一日としたいと欲しているだろう。具体的に何をすることが、それをつくることになるのだろうか。私が予定したことを提示することなのか。そういう場合もある。きのう成功したことでもとに進めることなのか。そういう時もある。いずれにしても、それはきっかけであって、要点は、きょう、子ども自身にとって快く、意味ある生活をつくることである。

この時を子どもと一緒に過ごしつつ、子どものすることをよく見て、それに対し、私の世界をかくすところなく聞き、応答してゆこうと思う。

T が木製の自動車を床の上で動かしたので、私も同じような自動車を籠の中からとつて動かすと、T は私の方を見て、同じように自動車を動かす。

私は、子どもがするのと同じことを自分もすると、子どもとの間の緊張が和らぎ、子どもが安心して自分の行動を進めることができることを経験しているので、このようにしたのである。ところが T は私がするのと同じように自動車を動かした。T は私をまねをしたので、それならば私は私の考え方で思い切り動いてみようと考え、私は T より一步先に出て、自動車を動かして歩いた。そうすると T は私の後についてくる。こうして私と T とは、部屋をぐるりとひとまわりした。

ひとまわりしてもとの棚にもどると、T は自分のと私のと自動車をふたつとも籠にいれ

---

て、棚に仕舞おうとする。重くて持ち上らないので、私に手伝わせる。籠を棚に置くと、すぐに、私の手をひいてホールにゆく。私は、Tが後についてきたとはいえ、そのことはTの望んでいたことではなかつたと感じた。Tが私のまねをするのならば、更に自動車をいろいろに走らせようと私は心の中で自論んでいた。私は思い切つてTに応答したのだが、それはTの思うところとは違うことが分つたので、私は籠を片づけるTに協力し、再びTの主導に従い、隣室のホールにいった。

ホールにしつらえてあつた組合せ椅子にゆく。Tは運動神経は鈍い方なので、椅子を自由に渡り歩くことはできない。椅子に一段上つてくぐり下りたり、二段目に手をかけてぶら下つたりして動きまわる。自分で動きながらも、私によりかかり、私の手につかまって渡つたりする。こうして、自分の身体の動きに応じて次々に変化する椅子の景観をたのしんでいるように思われた。そしてまた、私を支えにして、人との接触のチャンスを自ら作つていて。私はTが私によりかかつて椅子を渡るのを好まして感じていた。Tは私が助けるだらうことを少しも疑つていない。もうすこし以前だったら、私に頼らずにやるようになると助力を最小限にすることを考えたかも知れない。しかしこの日は、私は声を出したり、歌つたり、その場をたのしくすることが一層たいせつであるように思えた。四〇分位、同じような身体運動がつづく。そのうちに、Tは椅子渡りが次第に上手になつてくる。しかし子どもは運動能力の向上を目的としてこの遊びをしているのではない。子どもは身体の

---

動きに応じて変化する景観が面白く、また、私にもたれたり、私と声を交しながらこれをするのがたのしい。

私は、子どもと一緒に過ごす生活を、それが何に役立つかを問わずに、その現在が子どもにとってたのしいものであつてほしいと思う。そのためには、子どもと交わる保育者の現在が、明るく温かく開かれているかどうかが問われる。

ときとして私は、もっと能率のよいやり方があるのではないかとの疑念にとらわれる。これは、現在未だ到達していない状態を想定し、未来の視点から現在を見る見方である。そうすると現在にあせりを生じる。保育においては、そういう考えはとらない。子どもも大人も、現在を力強く、生きはじめるとき、それによつて現在が変容される。保育は、現在を新たに形成する行為である。

Tはそのうちに私を必要としなくなる。私を椅子の一端に残して、えのぐのコーナーにゆき、手にえのぐをつけてかいている。そのあと、裏庭で、じょうろに砂をつめて水を通して長い時間かけて苦労していた。そのことは、傍にいた実習生が保育後に報告してくれた。一日の経過をそこまで見るときに、私はTの世界の表現としての遊びが生まれているのを知る。

その場面だけでも、注意深く見て、いれば洞察できるはずであるが、Tの保育の過程を覗つて見るとじょうろ遊びの意味が一層明瞭になる。二年前、Tが三才のころ、昼食のあ

と、突然Tが庭からじょうろをもって部屋に入ってきた。床にまいたことがあった。傍にいた大人たちは驚いたのであるが、そこにはゆで卵が散乱していた。Tはゆで卵の殻を自分でむいて食べるのが常であったが、そのことを知らない大人がその日ゆで卵の殻をむいてTに与えたのであった。怒ったTは、その上にじょうろで水をかけて、その日はゆで卵を食べなかつた。

また、丁度一年前のある日、いろいろのことのあつた後に、Tは流しで水道の水を出しながら、色水をいれたじょうろの口から色水を出し、それから、自分のおちんちんを流しのへりにおいておしつこをしているのを見つけた。三本の水が同じように噴出して、何ともいえずユーモラスな場面だった。じょうろは、Tにとつて单なるじょうろではなく膀胱でもあり、Tの身体、T自身でもあつた。数え上げれば、いくつも同様の場面がある。じょうろが置いてあると、Tが遊んだあとだと分るくらいである。

この日は、Tがじょうろに砂をぎっしりとつめて、水をいれ、なかなか水が通らないのを苦労して水を通そうとしているのは、自分自身に対しても挑戦している姿に見える。実際、いまTは紙切り、粘土、自転車などいろいろのものに取り組み、成長しつつある。このような象徴的な遊びを生み出し、その遊びをすることによってTは独自の自分自身の課題を取り組んでいる。積極的に外の世界に向うことのできる柔軟な自分自身を、このじょうろの遊びによつて準備していると言つてもよい。

一日の経過をへるうちに、子どもが自分自身の世界を創造的に表現することができたと

き、子どもはその日をとくべつに満ち足りた日と感じるであろう。

朝、子どもと出合ったときには、具体的にどのようにして子どもにとって意味ある遊びが展開されるのか予想できない。生成展開する現在を、保育者が明るく力づけることによつて、思いがけない未来を子ども自身が形成する。保育者が自らの力不足を思つて考えこんでいるときには、過去の視点から現在を見ている。また、なすべきことをしていないのではないかとの不安にとらわれているときには、未来的の視点から現在をみている。いずれも、現在を生きているとはいえない。もちろん、大人の世界は、過去に根ざし未来に向つているのであるが、そのいずれかに固着させた規点から現在をみるのではなく、現在に生きることの中に両者はあらわれる。子どもの世界をあらわしている現在をよく見て、その現在に大人が本心を出して応答することにより、子どもと大人の合力による新たな現在が形成される。それが保育である。保育は未来のためにあるのでもなく、過去の経験を適用するのでもない。保育は現在を変容し、現在を形成する力である。

(愛育養護学校)